

## 抗日戦期の老舎と胡絮青夫人

杉 本 達 夫

### 1 老舎の貢献と夫人の決断

すでに多くの人が述べ、筆者も幾つかの文章の中で小出しに述べてきた事からを、まとめておこうと思う（既発表稿との重複を避けがたいことをおことわりしておく）。抗日戦期の老舎を支えた要因についてである。周知の如く、抗日戦期の老舎は長編小説『四世同堂』（但し第三部は後に在米中に書かれた）、短編小説「沒有問題的問題」、話劇『残霧』、長編叙事詩『劍北篇』をはじめ、数多くの作品を残しており、とくに『四世同堂』は今後とも、抗日戦期の代表作のひとつとして語られるであろう。作品活動だけを取上げて、抗戦文學に果たした老舎の役割は大きい、作品以上に評価されるべきは、文藝界の統一戦線組織たる文協（「中華全國文藝界抗敵協會」の略称）の維持運営に最大の貢献をしたという、文藝活動であると同時に社会活動でもある分野における功績である。

開戦前は出版の中心地から遠く隔たり、組織なるものとは無縁な、一介の作家に過ぎなかった老舎が、抗戦期大後方においては文藝界の中心に位置して活動し、その活動ぶりが、革命後の文藝界における老舎の位置を決めた。新國家成立時、滞米中の老舎に歸國の呼びかけがなされたのは、大後方における老舎の働きが評価されていたからにほかならない。

文協という統一戦線存続の象徴的意味をもつ組織の中で、無黨派の老舎が要の役割を果たしたのは、もちろん第一に老舎自身の資質による。愛國の情熱、自己犠牲の精神、實務と調整の能力、等々の、老舎自身に具わった要因である。だがそうした資質を持ちあわせていた者すべてが、十分にその資質を活かすかといえ、そうとは限るまい。資質を活かすこと自體を可能にする要因、いわば踏切板のごとき要因がなくてはなるまい。筆者はその要因の第一に

胡絮青夫人の決断を挙げたい。夫人の決断があってはじめて、老舎は単身で家を離れることができ、救國に邁進することができたと考えるのである。夫人の決断とその後の行動は、老舎への献身にほかならない。その献身への感謝の心が、老舎をいっそう文協の活動へとつき動かしていた。つき動かしたのは感謝の心だけではない。家族と離れた寂しさと、安否を気づかう不安は、老舎の心に空洞を生む。その空洞を埋めるためにも、老舎はいよいよ業務に没頭した。業務とは文協の會務であり、文筆家の糧道たる原稿書きである。「自述」と題する一文<sup>①</sup>の中の一節

「あれから4年になるが、ひまができると、きまって濟南を離れたときの妻の落着きと、息子の叱られて泣きそうになった顔を思い出す。思い出せば、涙も浮いてくる。だが、……わたしは泣くわけにはいかない。そして、そのたびに自分を忙しくするように手を打つ。ひまがなければ、無用な愁いも消え去るのである」

という述懐は、そうした心情をよく語っているだろう。

さらに言えば、無私の献身は自己犠牲であると同時に、それ相應の充足感を伴っていたはずである。

本稿では以下にまず老舎が濟南を離れる前後の状況を既觀し、次いで老舎の作品の中に夫人への感謝の念をさぐり、さらに、夫人の苦難の大旅行の紹介を試ることとする。

## 2 濟南における別離の前後

蘆溝橋で戦火が上がったとき、老舎は山東省青島にいた。ほどなく濟南に移り、11月15日に濟南を離れて、20日に武漢に着くのであるが、この間ほぼ4ヶ月の動きを時間に沿って記すと以下ようになる<sup>②</sup>。

7月7日：蘆溝橋に事變發生。老舎一家は青島在住。胡絮青夫人は出産とひかえて移動できず、

7月31日：胡夫人が入院。

8月1日：胡夫人が第三子を出産。

8月11日：老舎が単身で上海に先行することに決め、その旨を『宇宙風』發

行人陶亢徳に打電。

8月12日：陶亢徳より上海情勢の緊迫を告げる電報が来て、上海行きを取止め、濟南に移ることとする。9月から齊魯大學で教える約束ができていた。

8月13日：濟南に到着。齊魯大學に入居。上海事變始まる。

8月15日：夫人と三兒（一男二女）が濟南に到着。夫人の疲勞はげしくすぐ入院。續いて誕生直後の次女も入院。

8月28日：夫人と次女退院。

9月15日：齊魯大學の開講の日であるが、學生の半數がすでに去っていて、授業は成立たず。

11月15日：夕刻、政府軍が黃河鐵橋を爆破。老舎は單身家を離れ、最後の列車に乗り込む。

11月17日：鄭州に到着。一夜休息。

11月20日：漢口に到着。

戰火が接近し、未確認情報が交錯し、不安が増大するなかでの夫人の出産と入院、移住……、すでに4歳の長女と2歳の長男がいて、若き父親たる老舎の多忙は大抵ではない。加えて抗日救亡運動がある。濟南の教員も學生も次つぎ去ったが、いっぽう北平天津から逃れてきた學生たちも多く、わずかな期間にも抗日團體が生まれては消えていて、老舎はそれらに積極的に関わっている。張桂興編になる『老舎資料考釋』<sup>9)</sup>および『老舎年譜』（注(2)参照)それぞれの上巻によって、その様子をうかがうことができる。

さらには本業たる著作の仕事がある。36年夏に山東大學を辭して以來、老舎の収入は筆一本に頼ってきた。齊魯大が休校同然で給料が停止しているいま、慌しく不安な日々にも、収入源たる執筆は續けなくてはならない。だがいちばん物入りの時期に、収入を生む新聞雑誌が次つぎに停刊していった。戦局の不安は生活の不安と重なっていった。開戦時、老舎は二つの長編小説、『病夫』と『小人物自述』を執筆中だった。『小人物自述』は冒頭4章が天津の雑誌『方舟』第39期（8月1日刊）に掲載されたが<sup>10)</sup>、天津の陥落にともない同誌が停刊となったため、一年間の連載のはずが一回でとどめた。第5章以降の原稿は行方が知れず<sup>11)</sup>、どこまで書かれていたかも知るすべがない。『病夫』は上海の『宇宙風』に、『駱駝祥子』の完結にすぐ續いて、第49期から1年間連

載する予定で書き始めており、同誌第47期には馮玉祥『我的生活』、陳獨秀『實庵自傳』、郭沫若『海外十年』と並んで預告されていたが、開戦となって、國難と無縁な内容の物語を書き続ける氣になれず中斷、結局一字も發表しないままに終わった。この原稿もまた濟南に残されたあと、行方が知れない。

戦火が擴大し、濟南の陥落が濃厚となって、老舎は最後の決斷を下さなければならなかった。胡夫人もまた最後の決斷を迫られていた。このまま留まれば、占領下の民として生きることになる。齊魯大再開の見込みもなく、かりに再開されたとしても、あるいは新聞雑誌が次つぎ創刊されたとしても、きびしい制約の中の仕事しかできず、ましてすでに知名の士である老舎を、占領當局が放ってはおくまい。漢奸への道はもとより論外である。抗日の旗印の下で働こうとすれば、取るべき道はただひとつ、濟南を離れるしかない。

だが離れるとなれば、まず家族の問題が立ちはだかる。北平に住む老母への送金のめどもつけねばならない。8月12日に上海行きを決意したのは、戦火を離れた上海に生活の據点を求めようとしたのだった。その上海が戦火に焼かれ、各地に戦火がひろがり、交通が困難をきわめているいま、どこへ移住するにせよ、妻子の同行などできることではない。爆撃におびえながら、超満員の列車で移動するのであり、老舎自身の生命さえ測り難く、落着き先も働き口も何ら見通しのないままの脱出行なのである。幼児や嬰兒を帶同するのは無謀も甚だしい。といって、家族を送りとどける安全な郷里もない。だとすれば家族を残すほかはないが、残したからといって安全の保障はない。

濟南で書いた「半漢奸」<sup>6)</sup>の中で老舎は、安全な時には「一致抗日、抗戰貫徹」を叫びながら、いざとなると逃げ足の早い高官たちを非難するとともに、自分たちが抗日のために全力を盡すべきであると説き、他人が働かぬからといって自分も挫けるのは最も危険であり、最も意氣地なしだと述べて、自らの態度を明らかにし、かつ自らを勵ましている。いっぽう「友來話北平」<sup>7)</sup>の中では、北平に留まっている友人たちについて、

「かれらは動きたくないのではない、動けないのだ。家族たちは蓄えがあるとは限らず、かりに少々のかねがあろうと、まるまる路銀に使ってしまえば、目的地まで逃れたあと、飯をどうするのだ。……動かなければ、収入はすでにとだえ、しかも物價は暴騰しているのに、いつまで支えられるという

のだ……。だが家を捨ててひとり逃れるのは忍びがたく、しかも外部の情勢がどうなのか何ら知るすべとてなく……」

と述べて、かれらの苦衷を思いやっている。友人たちの苦衷とは、そのまま老舎の苦衷にほかならない。わが身の事情を語っているに等しい。ともかく濟南を出なくてはならないが、無謀を承知で家族を帯同するか、家族との永別を覚悟でひとり出るか。事態は切迫しているのに、老舎はなお決しかねていた。愛國の情と家族愛とに、心をひきさかれてたといえようか。

胡夫人の回想によれば、このころの老舎は毎日陸遊の『劍南詩稿』をくり返し吟じ、「楚雖三戸能亡秦、豈有堂堂中國空無人」（「金錯刀行」）「夜視太白收光芒、報國欲死無戰場」（「關頭水」）といったくだりになると、嘆息し、行き戻りし、ときに窓外の空を見上げつつ涙していたという<sup>6)</sup>。かくて夫人が決断した。回想にいう。

「……わたしは母子四人がそばについていたのでは、4本の縄が巻きついているようなもので、夫は何事もなしえないではないか。おまけに夫は、たいへんな母親孝行なのだが、一家をあげて江南へ行ってしまったら、北平に残った老母は經濟の源を絶たれ……。あれこれ考えて、わたしは決心した。夫の報國の志を遂げさせるために、千斤の重荷をわたしひとりて擔おう。夫と離れることがどんなに辛くても」「……わたしは言った。『安心してお行きなさい。濟南が陥落したときに爆死さえしなければ、きっとしっかり生きてゆきますから。わたしは教員が勤まりますから、それで幾ばくのおかねを稼いで子どもたちを育て、お母さんの死水を取ることができます……。いずれにせよわたしは中國の生徒に中國の文字を教えるのです。けっしてあなたの顔を汚すようなことはしません……<sup>7)</sup>」

夫人の決断によって老舎は最後の決断をした。家族への思いを断ち切り、わずか50元をもって、最後の列車に窓からもぐり込み、濟南を離れたのである。

胡夫人は北京師範大學國文科の出身である。このあとほぼ1年を経て占領下の北平に戻り、師範大學附屬女子中學で教えながら三兒を育て、老舎の母を支えた。42年8月にその母が満85歳を目前にして世を去る。夫人は葬儀を済ませた1年後の43年秋に、三兒を連れて重慶へ行き、老舎と6年ぶりの再會を果たす<sup>8)</sup>（本稿第4節参照）。そして夫人のもたらした膨大かつ具體的な北平情

報が、老舎の脳裡に占領下の北平の一大繪卷を作り出し、長編『四世同堂』を生むに到るのであるが、それは後の話である。

### 3 「一封家信」と「戀」

老舎は武昌に到着し、馮玉祥の知遇もあって、老向とともに抗戦文藝誌『抗到底』の編集にたずさわる。さらには文協結成の準備に参畫するうちに、やがてその中心人物となり、正式に發足後は一貫して代表の役割を擔い續ける。役名は總務部主任であるが、文協には「長」のつくポストがなく、總務部主任が實質的な代表だったのである。文協の會務に没頭する日々にも、心中に去來するのは家族の安否への氣づかいであり、妻への感謝であった。老舎は38年3月15日、陶亢徳あての手紙「一封家信」<sup>(11)</sup>の中で妻への感謝を綴り、妻が映畫のヒロインまがいに、夫と連立って外出することを好み、外見を飾り立て、夫に妻への奉仕を強要する、といった女性でないことの幸運を述べている。武漢に移ってきてもなお高級ホテルにたむろする婦人たちを、老舎は目の前に見ているのである。ここで想起されるのは、短篇小説「一封家信」<sup>(12)</sup>である。

主人公范氏は北平の機關で働く月給200元の職員。北平が陥落し、北平を離れて抗日のために働きたいと心を砕く。妻彩珠はこの世を一大娛樂場と心得ていて、國難に関心もなければ、范氏の心情も理解しない。家具をいっしょに運び、二等車で移動するのでもなければ、どこへも行かないという。やむなく范氏は稼ぎに出ると偽って家を出、武漢へ来て一點の手抜きもせずに働きつつ、妻と息子を氣づかい、送金し、手紙を書き續ける。妻から待ち焦がれた手紙は届いたもの、その内容は「…3度讀んでも、妻が何を言っているのか分からなかった。……小珠（息子）はどうしているだろう。范氏は便りの中を、一字一字丹念にさがした。だがない。小珠の名は一字も記されていない。……便りのことばの大部分が、范氏を責めていることが分かれると、妻の姿も何もかもがすうっと消えて、氏の眼前にはただ一枚の息の通わぬ文字と、氷のようなことばが並んでいるだけだった」結局、范氏は日本機の爆撃を受けて死ぬ。

人物像が誇張され、單純化されてはいるが、范氏の姿は老舎自身を投影している。占領下に生きることを拒否し、脱出を願いながら、妻子を見やりつつ思

い悩む范氏、武漢で骨身を惜しまず働いて、いつか職場の不可欠の人物になっている范氏、それはいずれも昨日と今日の老舎の姿の變形にほかならない。いっぽう范夫人は胡夫人と正反對の像である。陶亢徳あての手紙（「一對信」）にいう「もしも、——ああ、想像するだに恐ろしい〔我真不敢這樣想——〕夫人像であって、ことごとく胡夫人と對照的である。自己中心的で享樂を事とする姿勢も、國難にも民族の尊嚴にも無關心である點も、抗日に邁進しようとする夫の足を引っはるしか能のない點も、すべて胡夫人と對極にある。そして范氏は爆死し、老舎は生きて働き續ける。誇張し單純化した反對像を描くことによって、現實の幸運の實感をより鮮明に表明しているのであろう。すなわち、「一封家信」は胡夫人に捧げる贊辭なのである。

執筆時期はおそらく、文協が武漢から重慶に移轉することになり、老舎が先遣隊となって長江を遡上してきた直後の、きわめて慌ただしい時期（38年8月14日に重慶に到着している）と思われる。范夫人のような亡國の徒を糾弾するとか、暴露するとかいう重苦しさはなく、むしろ范夫人を戯畫化した、短く軽い一篇であって、老舎の作品群の中ではごく軽い比重しかもたないのであろうが、比重の如何にかかわらず、慌ただしい中に書いた一篇が胡夫人の像を逆説的に描き出していたことに、老舎の夫人への感謝の情が、書信の文字を越えて、いかに深いかを讀みとることができるだろう。

さらに想起されるのは、同じく短篇小説「戀」<sup>(13)</sup>である。

主人公莊亦雅は濟南に住むごく氣のいい男である。安價な書畫の収集を始めて、やがて収集のとりこになり、身のほどにもない額の品にも手を出してしまう。濟南が陥落したとき、逃げようと思いつながらも、収集品への愛着のゆえに留まってしまう。その果てに、収集品の保全と引きかえに對日協力を迫られ、ついに應じてしまう。「とかく執着は命取りになる〔戀甚麼、就死在甚麼上〕」という一句で物語は終る。

この作品が書かれたのは、發表の時から考えて、42年末ないし43年の早い時期であると思われ、老舎が濟南を離れてからすでに5年餘を經過している。5年も経ってなぜ今さらのごとく、濟南を舞臺にして、時世の犠牲のごとき書畫愛好家を描いたのか。おそらく第一の動機は、42年秋に40餘日にわたり成都一帯を旅した際、成都で濟南から逃れてきた友人に會って、齊魯大學が日本

軍に占據され、所蔵品がすべて奪い去られたと聞いたことであろう。奪い去られた物品の中には、老舎舊蔵の圖書も書畫も、さらには原稿も含まれていたと思われる。

老舎は「戀」のすぐ後に書いた隨想「四大皆空」<sup>149</sup>の中で

「この度の損失のなかで、語るもおかしなことなのだが、いつまでも口惜しくてならないのは、何年にもわたって收藏してきた書畫である。わたしは書畫がすきだが、一文たりともかねを出して買ったことはない。わたしの所蔵品のなかに、蘇東坡や王石谷はない。わたしは感情を重んじる人間であり、わたしが保存していた書畫は師や友の手になるものばかりである。……」

と述べ、とくに愛着のある4点とその作者を偲んだあと、「文化を保存しようとするなら、日本軍閥を倒さねばならぬ」と結ぶ。

主人公莊亦雅の書畫への愛着は、老舎自身の所蔵品への愛惜の念の投影にほかならない。だが老舎は書畫に縛られて大局を見誤ることはなかった。名譽と氣節を引きかえにするほどに執着するものが老舎にあったとすれば、それは書畫よりも家族である。友人のもたらした消息は、濟南での別離の悲しみをも同時に呼び起こしたにちがいない。書畫を家族に置きかえれば、主人公の心情は老舎の悲しみを切實に語っているだろう。

さらに推測を加えるなら、42年末に届いた手紙で、胡夫人が老舎の母の死を知らせてきたとき、北平を逃れて重慶へ行くという意向を伝えていたのではあるまいか<sup>150</sup>。家族の再會が現實の日程にのぼってきたことが、あらためて別離の時を思い起こさせたのではあるまいか。5年餘を経ても、夫人の決斷の重みは変わるものではない。自分とは正反對の悲運を辿る主人公を設定することで、抗日への獻身が可能であった自分の喜び、胡夫人への感謝、こどもたちへの思いを、これまた逆説的に表現していると筆者は考える。

非常時に遭遇したばかりに「漢奸」とならねばならなかった主人公を、老舎の筆は責めるようでもあり、同情しているようでもある。もし家族が桎梏となって濟南に留まっていたら、老舎もまた占領下の市政府に出仕を強要されたかもしれない。自分の幸運を喜ぶ気もちは、離れるべくして離れえなかった人びとへの同情と表裏一體をなす。主人公への同情を感じさせるのは、やはりわが身に置きかえて考えているからであろう。ごく短い作品であり、あるいは輕



く書き流したのかもしれないが、込められた意味は軽くはない。

#### 4 胡夫人の大旅行

胡夫人は43年9月8日、三兒を伴って北平の家を出、50日後の10月28日に重慶に着く。老舎は重慶の北に位置する北碚に住み、折から盲腸の手術を終えたばかりで病床にあって、重慶まで迎えに出ることがかなわなかった。夫と三兒が北碚にやって来るのは、さらに20日後の11月17日のことである。いかに戦時とはいえ、重慶まで50日もかかったのである。交通事情がいかに悪いか、道中の障害がいかに多いか、数字がまず語っている。しかも10歳、8歳、6歳の三兒を連れているのである。その苦難は想像に餘る。そのときの旅の記録を、胡夫人は書いている。燕崖という筆名で書いた、「從北平到重慶」と題する2萬餘字の一文である<sup>(16)</sup>。ここに概略を紹介しておきたい。

ただ、記録であるが、戦時下の占領区から大後方への移住であり、當然、関係者の事情もあって、事実を伏せた記述もあるかと思われる。たとえば柴垣芳太郎著『老舎と抗日戦争』<sup>(17)</sup>には「一同は身分證明書を入手するため、河南省東部の商丘へ歸省する商人の家族になりすまし、……山東以來のお手傳い陳媽を加えて、一行五人は密かに北平を脱出する」と記されており、これは胡夫人の直接の談話に基づくと思われるが、胡夫人の一文には陳媽なる人物は出てこない。梅太太なる婦人が同行しているのであるが、梅太太は自分で切符を買っており、時おり、自分の都合を言いたてたふしがある。胡夫人たちも梅太太の意向に合わせて行動する場面が多い。一行の人数も、ときに5名、ときに6名と書かれていて、梅太太が陳媽の仮の姿なのか、陳媽のほかに梅太太がいたのか、記述の限りでは定めがたい。また、商邱（商丘）での検問で、何しに來たと問われて、文中の夫人はこの地で教員をすることになったからと答えている。柴垣氏の記述とのずれが、記憶のずれによるのか、事実を伏せた結果なのか、いまは疑問のままに留めておく。

出発は、日取りを出発の2日前に決めるという慌しさだった（梅太太が自分の出発日を先に決めていた）。重慶には物がなくて買えないから、蚊帳さえ持参するくらいに用意せよという老舎の指示もあって、衣類やふんを含めて荷物がかさばる。前門通過の混亂を用心して、出発前日にいったん前門外の宿に泊

り、夫人ひとりが取って返して旅費の工面、紹介状の入手等の用件をすませるのだが、金策は實家の母の家を抵當にした。前門の検問と消毒、驛の検問と消毒、等々、乗車以前の關門を経て、京漢線の三等車に乗る。

旅程は9日午後北平驛を發ち、開封で乗りかえて（ここでも消毒）、10日夕刻商邱に到着、ここで紹介状を頼りに7日間滞在し（頼った先は軍の高官であったと思われる）、車夫の引く荷車に乗りかえて亳州（安徽省。現亳県）まで行く。亳州から荷車で、日中の境界線を超えて界首（安徽省）に向かい、22日夜に到着。界首からさらに荷車に揺られて洛陽に向かう。途中雨のため歸村で3日間足止めをくい、郟城、葉縣（いずれも河南省）を経て、10月4日ようやく洛陽に着く。洛陽からは汽車に乗る。二等の切符を買ったが中に入れず、三等に入って8日朝に出發し、靈寶（河南省）と華陰（陝西省）で乗りかえて、11日夜に寶鷄に到着。ここから先はバスになる。21日に出發、廣元で3日間足止めをくったあと、乗りかえて25日に出發、28日夕刻ついに重慶に着く。

切符の入手、列車の混雑と運行之亂れ、こどもの發熱と手當て、宿さがしと食物確保、荷車の交渉、身の安全と盜難除けの配慮、雨と足止め、等々、旅の困難は一瞬の弛緩を許さない。靈寶での深夜の乗りかえの際には、足下にプラットホームがなく、おまけに乗りかえた列車が出發するまで、炎熱の中で1日半も待たされた。列車に取りついた難民は、あるいは振り落とされ、あるいはトンネルで剥ぎ落とされた。亳州から界首までの道は、38年6月の政府軍による黄河決壊の傷あと<sup>(18)</sup>がまだ生々しく、随所に水が残っていた。もともと水路の多い地域でもある。たびたび下りて歩かなければならず、場所によっては「陸路を船で進」み、あるいは浅い水の中を歩いた。その洪水を胡夫人は政府軍が黄河を決壊させた際の災害だと記し、「開封を水浸しにして、日本軍を撤退させる作戦だった」という車夫のことばを紹介している。場所からいえば、この邊りは安徽省であり、大小の河川は淮河水系に屬するのであって、決壊の地花園口からは東南に200キロ以上も離れている。河南省内は洪水あとを見ることもなく進んでいるのに、先に通った安徽省内が、5年餘を経てもなお大被害の跡を生々しく残っていたというのは、淮河水系の位置のゆえであろうか。胡夫人の記述は、43年秋の段階の興深い現地報告となっている。

荷車はゴム車輪だが、パンクや空氣漏れをくり返した。バスは燃料切れで頓

挫した。およそ日程を計算できない、明日の豫定さえ定めがたい旅だった。

そうした苦難と危険の描寫に加えて、胡夫人は道中の光景をも活寫している。さらに、物價についても具體的な情報を提供してくれている。例えば、北平から南邱までの三等切符が中國聯合準備銀行券、いわゆる「偽幣」で30餘元、開封でうどん1杯が6元だった。（「安い」と強調しているところからすると、中國の法幣で支払ったのかもしれない）。日中の境界に近い亳州で換金したとき、準備銀行券1元が、中國の法幣8.5元に替った。鄆城の木賃宿で宿賃が1人1泊10元だった。葉縣では柿1個が大で2元、小で1元した。洛陽では牛肉湯が1杯10元、洛陽から寶鷄までの汽車賃が二等で1人650元した。寶鷄の宿賃がある宿屋では1泊1部屋80元、別の宿屋は50元だった……。夫人は値段を記した多くの場面で「安い！」と記している。また開封で、「ここにはどうして、こんなに大きくて白いマントウがあるの？」と、こどもたちが問いかけたことをも記している。北平の食糧事情を期せずして語っている。もともと「ここで飢え死にさせられるくらいなら、青天白日旗の下で死にたい」という思いも、重慶行きの決心を促す一要因だったのである。

ともあれ三兒を一兒も缺くことなく、大量の荷物を携えて、苦難の旅程を辿りきったのだ。それはまさしく、女ひとりの長征ともいうべき大事業だった。老舎が大後方で抗戰文學の事業に邁進しているとき、夫人は夫人で、濟南以來の歲月を含めて、けんめいに抗日戦を戦っていたのである。

以上

## 注

- (1) 「自述」。重慶『大公報』1941年7月7日に掲載。いち『老舎生活與創作自述』（胡絮青編。香港三聯書店。1980年刊）その他に収録。
- (2) 老舎の年譜には曾廣燦・吳懷斌編『老舎年譜』（曾・吳編『老舎研究資料』上下巻のうち上巻所収。北京十月文藝出版社、1985年）、郝長海・吳懷斌編『老舎年譜』（黃山書社、1988年）、甘海嵐編『老舎年譜』（書目文獻出版社、1989年）のほか、張桂興編『老舎年譜』上下（上海文藝出版社、1997年）があり、張編のそれはいちいち関連文獻を引用していて特に詳しい。
- (3) 上下2巻。中國國際廣播出版社、1998年。
- (4) 若い文學愛好者の手で發掘され、『十月』86年第1期に再録。
- (5) 完成を見ずに終った長篇『正紅旗下』は、『小人物自述』を發展させたものと考えられる。なお『正紅旗下』は1961年から62年にかけて第11章まで書いて中斷し

た。のち80年に人民文學出版社から単行出版。

- (6) 『宇宙風』第49期（37年10月16日）に掲載。のち『老舎文集』第14巻（人民文學出版社、1989年）に収録。
- (7) 『宇宙風』第50期（37年11月1日）に掲載。
- (8) 王行之「老舎夫人談老舎」による。『人物』80年第1期に掲載。のち(1)中の『老舎生活與創作自述』その他に収録。
- (9) (8)に同じ。胡夫人の談話を王行之氏が整理編集したものであって、夫人のことはそのままではないが、趣旨に変わりはないはずである。
- (10) この大旅行は43年秋のことであるが、(8)の夫人の回想では42年秋、葬儀のあとすぐに出発したことになる。筆者も夫人から直接「43年ではなくて42年である」と訂正された記憶がある。葬儀から出発までの1年間には、さまざまな用件と準備があったと思われるが、夫人の記憶の中ではその1年が空白に等しいのかもしれない。
- (11) この手紙は発表を前提として原稿がわりに書かれたもので、「一封信」と題して『宇宙風』第67期に掲載。のち(1)の『老舎生活與創作自述』その他に収録。
- (12) 『文摘』戦時旬刊第37期（38年11月）に掲載。のち『火車集』その他に収録。
- (13) 『時與潮文藝』創刊號（43年3月）に掲載。のち『貧血集』その他に収録。
- (14) 『文壇』第2巻第1期（43年4月）に掲載。のち『老舎生活與創作自述』その他に収録。
- (15) 占領下の地域と大後方との間に郵便の往來はあった。老舎が重慶から出した手紙はもちろん、旅行中に邊區から出した手紙も、北平の夫人のもとに届いている。通信には偽名を使っていた。
- (16) 『時與潮文藝』第4巻第3期（45年3月15日）に掲載。
- (17) 東方書店、1995年。當該箇所はP. 195。
- (18) 黄河堤防の爆破は38年6月7日、鄭州の北の花園口で實施され、水は河南、安徽、江蘇の三省にひろがった。「軍事上の祕密」であるからというので、一切事前の通告をせず、その結果一千万人が家を失い、数十万人が溺死した。当初は日本軍の開封占領を阻止すべく作業を始めたのだったが、間に合わなかったため、目的を鄭州防衛に變え、爆破の場所を移したのである。